

## 頼諭周辺の言談——『真俗雑記問答鈔』を手がかりに——

高橋秀城

はじめに

頼諭僧正（一二二六—一三〇四）の周辺には、さまざまな言説が飛び交っていた。それは、頼諭が著した『真俗雑記問答鈔』（以下、『真俗雑記』）を繙くことにより具体的に窺い知ることができるといえる。

『真俗雑記』は、その名の通り、「仏の教え」と「世俗の教え」が問答形式によって語られた書物である。総項目数が千二百余項にも及ぶ大著であり、百科辞典的性格を有している。引用書目も、『大日経』『華嚴経』『法華経』などの經典類から、『論語』『老子』などの中国典籍、「勸進帳」「落書」「縁起」に至るまで幅広く、枚挙にいとまがない。また、「聞書」や「口説」など、口伝えによる記載が多いこともその特徴と言える。

内容は、談義の場における伝受の聞書や、史実・故実・消

息など多岐にわたっており、その中には、和歌や漢詩、夢想の記事や歌学に関するものなど、文学に関わる記述も多い。これまで『真俗雑記』は、頼諭の教義や伝記を探るといって、主に教学や歴史学の方面から取りあげられてきた。しかし近年、文学の方面からも注目されてきており、頼諭を含む伝法院方が、延慶本『平家物語』の成立に関与したであろうことも論じられている。<sup>①</sup>

稿者はこれまで、『真俗雑記』に見られる頼諭の和歌を解釈することにより、頼諭の和歌知識や、頼諭を取り巻く詠歌環境の場を考察してきた。<sup>②</sup>『真俗雑記』の文学的記事には、こうした和歌以外にも、『沙石集』『古事談』『江談抄』『古今著聞集』などといった、いわゆる「説話集」との類話が見出せる。そこで本稿では、『真俗雑記』中に見られる「説話」に関する記事を拾い上げることで、頼諭周辺における言談の場を浮かび上がらせ、さらには談義の場における説話や和歌

の役割についても言及したい。

## 一 黒善阿弥陀仏発心事

『真俗雜記』には、「先達等遁世事」(第七)<sup>(3)</sup>のような世間を逃れた遁世者の話や、「貞松房最後事」「空晴僧都最後事」(第十八)のような往生話が見える。その中で第九には、黒善阿弥陀仏の発心譚として、次のような話が見える。

### 黒善阿弥陀仏発心事

問何答本南都住ケル後、高野ニ住ケルカ、為メニ学文他行之間、或所ニ宿シテアリケル。宿所ノ人誦ニ此詞一ヲ云、  
スルスミノ 叵如身後チ有ニ何ニ事一カ、アシタアシタ ヨノナカ 応 向ヘ世間ハ無レ所レ求ルニ云々。  
黒善聞此詞一ヲ、所詮学問ト云ハ此マテニテコソ有ント云テ、  
其ヨリ発心シテ修行セリ矣

文応元年十二月三日<sup>(5)</sup>

話は、南都から高野山に登った黒善阿弥陀仏が、学問のためにも他所へ出掛けて行った時の出来事である。さる所で止宿した際に、宿の人が何気なく「スルスミノ 叵如身後チ有ニ何ニ事一カ、アシタアシタ ヨノナカ 応 向ヘ世間ハ無レ所レ求ル」という言葉を口にした。この詞を聞いた黒善阿弥陀仏は、「要するに、『学問』というものは、これまでのことであるよ」と言って、その時から発心して修行に励んだという。

先ず、この話の中で、宿の人が口ずさんだ「スルスミノ 叵如身」の言葉について触れておこう。今回底本とした大谷大学本『真

俗雜記』には、「スルスミノ 叵如身」の注として、無住道暁(一一二一六—一一三二二)の『沙石集』(弘安二年(一二七九)起筆)と『雜談集』(嘉元二年(一一三〇四)起筆)が挙げられている。この注記は、『真俗雜記』の伝本を収集し、書写校合を行った惟圭範海(一六八七?—?)が書き留めたものであり、<sup>(6)</sup> 惟圭が指し示した『沙石集』とは、おそらく以下の箇所を指すと思われる。

故明禅法印、止観ノ談義セラレケル座ニ、或遁世入道、望テ聴聞シケリ。法門ノ次ニ、スルスミ 樂天ノコトバヲヒキテ、アシフミタテヌ 「スルスミ 叵如ノ身後チ有ラン何事カ。応向世間ハ無所求」ト云事、其沙汰アリ。言心ハ、人ノ一物モ不持、手ウチフルヲバ、スルスミト云フ。マタツエツクホドノ地モモタルヲ、足フミタテヌ世間ト云フ。身ヲステ、カクナリヌレバ、求ムル所モナク、煩モナシ。嘆スクナク、心ヤスシト云事也。是ヲ聞テ、此入道、「止観ノ法門ハ承ヌ」トテ出ヌ。此入道(ヲ)、「止観一部ハ皆心エツ」トゾ、法印被申ケル。

(卷四「道心タラム人執心ノゾクベキ事」)

ある遁世僧が明禅法印の『摩訶止観』の談義の場に臨席した際に、明禅法印が法門を説く中で、白樂天の言葉を引いて談義をした。明禅法印が語るには、人が手ぶらであることを「スルスミ」と言い、杖を突くほどの土地も持たないことを「足フミタテヌ世間」と言う。要するに、出家して身を捨て

てしまえば、欲望が無くなり心が安らかであるというのだ。この言葉を聞いた遁世僧は、「止観の法門を承知しました」と言って退出したという。

明禅法印が談義で引用した白楽天の言葉とは、『沙石集』の諸注釈書が指摘するように、『白楽天後集』巻十一「偶吟二首」中にある「正如身後有何事。応向人間無所求。」であろう。冒頭の「正如身」を「叵如身」と書き変えている。「叵如身（匹如身）」とは、『類聚名義抄』に「スルツミ（単己）」とあるように、ただ一人、無一物であることを表す。

『真俗雜記』の中で、黒善阿弥陀仏が耳にした言葉は「叵如身」であった。「応向」の読み方など『沙石集』と若干異なる箇所があるものの、やはり白楽天の詩に基づいている。黒善阿弥陀仏は、白楽天の詩の一節から、出家の功德を悟り、発心修行に励む決意をしたのであった。

さて、頼瑜は如何なる資料によってこの発心譚を書き記したのだろうか。管見では、他書に同様の話を探し得ていないが、以下の『一言芳談』の話は注目される。

黒谷善阿弥陀仏、物語云、「解脱上人の御もとへ聖まゐりて、同宿したてまつりて、学問すべきよしを申。かの御返事に云、「御房は発心の人と、見たてまつる。学問してまたく無用なり、とくかへりたまへ。これに候ものどもは、後世の心も候はぬが、いたづらにあらむより

はとてこそ、学問をばし候へ」とて、追返されし云々。」（『一言芳談』巻之上）

これは黒谷の善阿弥陀仏が語った話である。解脱上人貞慶（一一五五―一二二三）のもとに聖がやってきて、学問したい旨を願い出た。しかし貞慶が言うには、聖は既に発心をしており、学問は無用であると言って追いつ返したという。

この話を物語った善阿弥陀仏は、『沙石集』巻一に高野山の明遍（一一四二―一二二四）僧都との交流が語られており、高野聖としても登場している。

この話と、『真俗雜記』を比較してみると、学問修行の中から発心した黒善阿弥陀仏（『真俗雜記』）と、発心した聖が学問を願い出る（『一言芳談』）という相違は見られるものの、共に「学問」と「発心」を主題としており、特に「発心」を重視している点で共通している。そして何より、「黒善阿弥陀仏」と「黒谷善阿弥陀仏」という名前が酷似しており、あるいは同一人物ではないかとさえ思われるのである。

『一言芳談』は鎌倉末期成立とされ、『沙石集』『雑談集』と、ほぼ同時代の法語集とされる。『真俗雜記』の話は、文応元年（一二六〇）に記されていることから、これらの説話集に先行するかとも推測されるが、現段階での影響関係は不明と言わざるを得ず、さらなる検討を要する。ただし、頼瑜周辺において「黒善阿弥陀仏発心事」のような、説話集と類似する話が語られていたことは確かである。

『真俗雜記』には、この他にも、例えば次のような話が見える。

### 俊憲秀句事

問何答内宴詩序云上林花芳鳳馴ナレ漢内ノ之露ニ西丘草  
嬾シテ馬嘶イバツ周年之風ニ父通憲為俊憲ノ内宴序ニ自書テ懷  
中シテ俊憲持参シテ入ニ見参ニ之時此ノ句ノ随喜落涙勸清書ヲ  
立歸時ニ向ニ北方ニ此我勝ルソト云ケリ又願文信力成スルコトヲ  
云李廣カ之思ニ父讎也草中之石飲レ羽ハフサ漢土ノ之信ニ臣説ニ  
也河上之波結レ氷（『真俗雜記』第十四）

これは、藤原俊憲（一一二二—一一六七）が書いた内宴詩序を、父藤原通憲（一一〇六—一一五九）が批評した話である。

この話は『古事談』第六「亭宅諸道」に以下のように見える。

俊憲卿書ニ内宴序ニ西岳草嫩馬嘶周年之風。  
通憲入道之許ニ令ニ見合ニケレバ。一見之後。剋限已至。  
早清書ト云ケレバ。猶一兩日返読ナドシテ。有ニ沈思之  
氣ニ。起後入道云。コ、ガ法師ニハマサリタルトゾトテ  
涕泣云々。件序入道モ書儲。懷中ニ持タリケレド。尚劣  
タリケレバ不ニ取出ニ云々。

『古事談』では『真俗雜記』に見える「願文信力成」以下の李廣の話は見られない。この典拠が奈辺にあったのか、興味深いところでもある。

また、『真俗雜記』第十には次のような話がある。

### 常世問詞ニ右流左死ト云事

問何答大臣配流之時右大臣ニテ流罪セラレ其時左大臣死亡  
故ニ右流左死ト云也其時ヨリ始ル言也（『真俗雜記』第十）

「右流左死（ウルサシ）」の語が、菅原道真（八四五—九〇三）が流され、藤原時平（八七一—九〇九）が薨じたことに由来するという語源を語る説話である。この話は、『江談抄』（天永二年（一一二二）頃）第三に、

以英雄之人称右流左死事

世以英雄之人称右流左死。四字皆異音其詞有由緒。昔菅

家為右府、時平為左府。共人望也。其後右府事被流、左府薨逝。故時人称有人望之者、号右流左死云々。

とあり、ほぼ同内容であることから、『江談抄』に依拠した言説であることは明らかである。

次に『真俗雜記』第十四にある話を挙げる。

唐人未道際許連歌云  
捨身惜シヤンシヤツク花思ハシトヤヲモイケン  
打不立チヤウフリウテウイウ鳥有トトリモアリケリ

（『真俗雜記』第十四）

この唐人の連歌については、『古今著聞集』巻五に見える。唐人連歌の事

或所に佛事しけるに、唐人二人きたりて聽聞しけるが、磬に八葉の蓮を中にて、孔雀の左右に立たるを文に鑄つたりけるをみて、一人の唐人、「捨身惜花思」といひけるを、今一人きゝてうちうなづきて、「打不立有鳥」といひける。きく人その心をしらず。或人のどかにあむ

じつらねければ、連歌にて侍けり。

身をすてゝ花を惜とや思らんうてどもたゝぬ鳥もありけり

かくおもひえてけり。わりなくぞ思つらねける。

『古今著聞集』ではより詳細に語られており、『真俗雑記』に見える話の源泉が知られるのである。

これらの他にも、「説話」の要素を含む話、「説話集」に類話が見られる話も数多くあると思われる。しかし、ここまで雑駁に見た限りにおいても、『真俗雑記』には、『沙石集』『雑談集』『一言芳談』『古事談』『江談抄』『古今著聞集』などの説話集との類話が存することが確認された。

頼諭の周辺には、さまざまな説話が語られる言談の場が存在していた。そこで語られていた言説は、仏法を説く「説経」や「談義」などとも深く結び付いていると考えられ、ここから、言談の場と談義の場との共通の領域が仄見えてくるのである。

## 二 尊師物語事

『真俗雑記』第十三には、「義範御影物語事」「安祥寺宗意物語事」といった、義範(一〇三一一〇八八)や宗意(一〇七四一一四八)など、先徳の「物語」が語られている。そうした中から、本節では「談義」とも関わると思われる、理源大師聖宝(八三二一九〇九)について記した「尊師物語事」

について考察を試みたい。多少煩瑣となるが、全文を引用する。

### 尊師物語事

問回答 憲御口云尊師<sup>①</sup>是貞観寺ノ真雅僧正弟子也然ニ真雅僧正極テ犬ヲ愛ラレケリ尊師ハ犬ヲ惡マレケリ或時獵師ノ来ケルニ尊師彼犬ヲ賜ケリ真雅僧正後聞ニ召彼ノ由ヲ停レ同宿ヲケリ依レ之尊師流ニ浪シテ諸国ニ被ニ乞食ニ至ニ讚岐国ニ立ニテ寄或処ニ給ニ門外小物アリケリ眼様サカシケニシテ可レ為ニ法器ニ之相アリケリ尊師苦語ヲウテ京ニ具スベキ由ヲ問ケレハ彼ノ小物ノ領掌シケリ彼ノ家人見レ之ヲ尊師ヲ入レテ室饗応シケリ小飯ヲ盛ニ土器ニ勸レ之尊師受ニ彼ノ施ヲ畢テ後彼ノ小物ヲ取テ打負テ一日ノ間般若寺ニ着給ニケリ又為レ養ニカ彼小兒ヲ又乞食ス或処ニ前キ追声ノシケレハ門ノ片方ニ立寄ケレハ良房卿乗車シテ過ケルカ見ニ尊師ヲ非ニ只人ニハトテ召寄テ同車シケリ至ニテ良房ノ家ニ物語シケルニ尊師申ニ如上ノ事ヲ給ケリ問被申ニ許彼ノ僧正ノ御勘氣ヲ候ナンヤ良房ヤスキ程ノ事ニコソトテ約<sup>②</sup>レテ日又装束ナント調ヘ儲ケテ令着セ車シテ被レ參ニ貞観寺ニケリ臨ニ彼ノ寺ニ留ニ車榻ヲ置テ彼ノ上ニ置ケリ金剛草履ヲ尊師車内ニテ尋ニ子細ヲ良房貴辺ノ料也<sup>③</sup>仍車ヨリ下テ与良房ト俱ニ僧正ノ前ニ被レ參ケリ良房卿可被許勘氣ノ之由被申ケリ僧正依ニ一旦ノ事ニ勘当シ候雖レ然後悔無ニ申限ニ候之処来臨神妙之由被レ仰ケリ既許勘氣之後被小兒ヲ

召寄<sup>セテ</sup>学問セサセラレケリ聡敏利根無<sup>ニ</sup>申限<sup>一</sup>即為付屬  
弟子<sup>一</sup>給<sup>ヘリ</sup>彼小兒者今般若寺僧正觀賢是之

この話は、頭書に「憲御口云」とあるように、頼瑜がその師である憲深（一一九二—一二六三）の口伝を書き留めたものである。

この話は、四つの部分に大別することができる。①犬が原因で真雅（八〇一—八七九）に勘当された話、②勘当された尊師（聖宝）が、讃岐国で小兒と出会い、京の般若寺に連れくる話、③藤原良房（八〇四—八七二）に謁して、真雅に勘当を許された話、④讃岐より連れてきた小兒に学問をさせ、その子が実は観賢（八五三—九二五）であると語る話である。

さて、この聖宝の物語は、平安時代末から鎌倉時代初頭の醍醐寺僧慶延（生没年未詳）による醍醐寺蔵本『醍醐寺雑事記』（全十五卷）に見出すことができる。『醍醐寺雑事記』には、醍醐寺に関するさまざまな記事が収録されており、『平家物語』との関連も指摘されている。<sup>(1)</sup>

この聖宝の物語は、『醍醐寺雑事記』の巻頭「上醍醐雑事記」<sup>(2)</sup>巻第一に記録されている。

#### 一 准胝堂（中略）

堂建立由来尊師者貞觀寺僧正<sup>真雅</sup>入室弟子也僧正愛犬令飼尊師惡犬令厭愛憎水火之処（後略）

長文のため、冒頭部分のみ挙げたが、ここに「堂建立由来」とあるように、『醍醐寺雑事記』では聖宝の物語というより

も、上醍醐准胝堂建立の由来として書きおこされている。また、全体的に『真俗雑記』『尊師物語事』よりも詳細に記述されており、分量が多い。さらに、話の展開を比較してみると、真雅に勘当され、讃岐の小兒を般若寺に連れてくるころまではほぼ同様であるが、その後、小兒に学問をさせ、その子が観賢であると語った後に、真雅より勘当を許される話が続いている。つまり、『真俗雑記』では①②③④であった展開が、①②④③となっており、勘当を許された後、小兒を身近に呼び寄せて学問をさせたという『真俗雑記』の展開とは異なるのである。

では、こうした記述の相違はなぜ起こったのであろうか。『真俗雑記』『尊師物語事』は、憲深が語った口伝であり、憲深の思い違いとしてしまえばそれまでだが、ここで醍醐寺蔵本『醍醐寺雑事記』「巻第一」の奥書に注目したい。

慶長九年<sup>甲辰</sup>二月 日開釈迦院経藏頗聖教二百余筐如形披  
見了此紀十五帖以慶延前從儀師自筆本写留之三宝院宝蔵  
之本也既及四百余歳于今相殘奇妙々々但第一欠卷了仍以  
報恩院僧正憲一 略抄御自筆写之所々令略之給尋求彼根  
本之正本可書加之耳 座主准三后<sup>在判</sup>記之

これは、慶長九年（一六〇四）に『醍醐寺雑事記』を写した座主義演准后（一五五八—一六二六）の奥書である。義演によれば、傍線部にあるように、三宝院の宝蔵に巻第一の完本が見当たらなかったことから、巻一のみ報恩院憲深の手に

なる抄本を用いて書写したと記している。

この『醍醐寺雑事記』を略抄した憲深とは、言うまでもなく、『真俗雑記』『尊師物語事』を語った憲深に他ならない。憲深は、慶延の『醍醐寺雑事記』巻第一の完本を目にしており、それを抄出する形で書写していた。その略抄本をもとに、さらに簡略化して語ったものが、この「尊師物語事」ではないかと思われる。憲深は、談義という場において、内容を理解し易くするために敢えて改変し伝授したのではないか。「尊師物語事」は、醍醐寺の記録を憲深自らが再構成し、談義の場における口伝として再生、機能させた「物語」であったと考えられよう。<sup>(13)</sup>

### 三 頼瑜以外の和歌

『真俗雑記』に見える頼瑜自身の和歌や歌論に関する記述については既に旧稿<sup>(14)</sup>で論じたので、本節では、頼瑜以外の和歌について触れておきたい。

先ず、第七には次のような歌が見える。

#### 又辰寿得業歌事

問答トシノウチニハルハキニケリヒト、セヲコソトヤイ  
ハムコトシトヤイハム

此ヲ狂シテ云トシノウチニハレハキニケリヒタタレヲコ  
ソノヲヤキンコトシノヲヤキム

又ワカノウラニシホミチクレハカタヲナミアシヘヲサシ

テタツナキハタル

此狂云キヌノウラニヤレミチタレハカタヲスヘアシテヲ  
カケテワレナキワタル (『真俗雑記』第七)

最初の「トシノウチニハルハキニケリ」は、『古今集』に見える、

ふるとしに春たちける日よめる

としのうちに春はきにけりひととせをこぞとやいはむこ  
としとやいはむ<sup>(15)</sup> (巻一・一・在原元方)

であり、三首目の「ワカノウラニ」は『万葉集』に見える、  
わかのうらにしほみちくればかたをなみあしへをさして  
たづなきわたる

(巻六・919・山部赤人、『古今集』仮名序)

である。辰寿得業は、「此ヲ狂シテ」とあるように、これら二首を狂歌的に作り替えて詠んでいる。例えば一首目の歌では、第二句「ハル(春)」を「ハレ(晴)」、第三句「ヒト、セ(一年)」を「ヒタタレ(直垂)」、第五句「コソトヤイハムコトシトヤイハム」を「コソノヲヤキンコトシノヲヤキム」と語句を変えることによって、「年内に来てしまった晴の儀式には、去年の直垂を着ようか、今年のを着ようか」と面白く詠っている。

こうした狂歌的な歌を、頼瑜はなぜ『真俗雑記』に集録したのだろうか。単純に、頼瑜の周辺でこうした言語遊戯的な詠歌が愛好されていたからかもしれない。しかし、前節まで

見てきたように、『真俗雑記』が説話集と結び付いていることを踏まえれば、次の『沙石集』の話は注目しても良いように思われる。

学生ノ万事ヲ論義ニ心フル事

三井寺ニ、教月房法橋トテ、中比ユ、シキ碩学有ケリ。幼少ノ時ヨリ、萬事ヲヤメテ、学問ノ外他事ナクシテ、論談決擇ノ道ユリタリケルガ、和歌ノ道ハ、ツヤクシラザリケリ。弟子共、「当世天下ニ翫ブ和歌ノ道、御心得候ハヌコソ、無下ニ覚ヘ候ヘ」ト云。サテ、「和歌ノ体ハ、イカナル物ゾ」ト云ヘバ、古今〔ノ〕歌〔ヲ〕カタル。

年ノ中ニ春ハキニケリヒト、セヲ コゾトヤイハン  
コトシトヤイハム

ト云ヘバ、「兩方ニ問タルナ。御房、問ハレタリく」トゾ云ケル。万ヅ論義ニ聞ケルニコソ。一代ノ聖教ハ、仏意ニテ、「生死ヲ解脱センタメナリ。道人ノミルニハ、皆出離ノ門也。説経師ガミルニハ、ミナ説経書也。マシテ聖教ハミナ」、論義ニコソ侍リケメ。出離ノ道トヨクヤ。智恵ヲ生ズル方便ハ、ユ、シケレドモ、是非執諍ハ、正ク生死ノ業ナリ。能々思ワクベシ。

〔沙石集〕卷第五

この話では、三井寺の教月房法橋という碩学と、弟子たちが「和歌の体」について語っている。その中で話題に上った

歌が、この『古今集』の巻頭歌であった。下の句の「コゾトヤイハンコトシトヤイハム」という問い対して、「万ヅ論義ニ聞ケルニコソ」と語っている。和歌が論義と結びつき、仏の本意を説いた話である。

この話を讀むと、『真俗雑記』の辰寿得業の歌も、論義と関わりがあるように思われてくる。詠者の「辰寿得業」については未詳だが、「得業」とあることから、一定の修行を修めており、しかも、奈良三会（興福寺の維摩会・法華会、薬師寺の最勝会）などの法会に出仕した僧侶であったことも想像される。こうしたことを踏まえれば、単に古歌を面白く作り替えただけではなく、そこに論義の世界が重ね合わされていることも想像されるのである。

その他、旧稿で挙げられなかった和歌について以下列挙し、簡単に触れておきたい。

① 問中川実範上人歌事如何 遁世初本寺興福寺宗徒

来<sup>テ</sup>頼<sup>リ</sup>ニ可被<sup>レ</sup>帰<sup>ル</sup>住<sup>ニ</sup>之由申遣而已

ヨラステ、シハノイホリニスミスモノコロモノイロハカ  
ヘルモノカハ

〔真俗雑記〕第三

② 南都了念房於中川向寒飯ニヨミケル

ナトサレハコシキノイキノムカウヘニヒエテマタナラツ  
メタカルラム

〔真俗雑記〕第三

③ 南都解脱房詠歌事

問答ハカコヒハツヒカフソリノアヒカタミマテアリトテ



モナニ、カハセム

〔真俗雑記〕第七)

④ 先師報恩院僧正御房歌事

湯山ニシテ 僧綱達見聞閑形被読歌時宝閑ヲ行ニテカクナ  
ム

カタハトテ頭ヲタニモヒキル、マナンノ秀句手向歌ニクヒヒネ  
ルラム

〔真俗雑記〕第十四)

⑤ 木幡上人読悟了同未悟ヲ云報恩院僧正御房大悟  
同未悟云々

ツユヨリモアタニオモヘシユメノ世ヲイマハウツ、トミ  
ル我身カナ

〔真俗雑記〕第十四)

⑥ 上人歌事

梅尾上人歌事

問何答梅尾上人歌云ユメノヨノウツ、ナリセハイカ、セン  
サメユクホトヲマテハコソアレ  
木幡上人云マコトナキ。ユメノヨナレハイマサラニ  
サムルウツ、モイツカマツヘキ

〔真俗雑記〕第十五)

ここに挙げた七首は、①中川上人実範(？—一四四)、②了念房(生没年未詳)、③解脱房貞慶、④報恩院憲深、⑤木幡山観音院真空(一一〇四—一二六八)、⑥明恵房高弁(一一七三—一二三三)と真空の歌である。

①は中川実範が興福寺から忍辱山円成寺に隠遁した際に詠んだものと思われる。②の南都了念房については、如何なる人物か定かではない。ただ、詞書にある「中川」は、おそらく添上郡にある中の川と思われる、実範は中の川の地に成身院を建立していることから、おそらく実範と交流のあった僧侶

と思われる。③は諸本により本文異同があるが、「ハカコヒハ(我が恋は)」とあることから恋の歌であろう。④は憲深が湯山で詠んだものである。『続門葉集』(176)には、

前権僧正成賢湯山にて人人に歌よませて鎮守明神に  
たてまつるけるに、  
法印行嚴

ほととぎすなれも手向の心あらばしめのうちにはをちか  
へりなけ

として、憲深の師である成賢(一一六一—一二三二)が湯山を訪れた際に詠ませた歌が見える。憲深の歌の第四句「秀句」の右傍には「手向歌」と注記されており、あるいは鎮守明神に奉納した和歌であろうか。⑤は頼瑜の師である真空の歌であり、⑥では明恵の夢の歌と並んでいる。⑥の明恵歌は、『新勅撰集』(釈教歌・626)、『明恵上人歌集』(35)、『梅尾明恵上人伝記』等に見え、人口に膾炙した歌であった。この明恵歌は、『真俗雑記』第十五の巻末にも記されており、明恵の歌を先頭に九首の和歌が並んでいる。既に旧稿でも論じたが、頼瑜は明恵の歌を模範としていたことが窺える。

ここまで、頼瑜以外の和歌について一覽してきたが、『真俗雑記』には、真空・憲深など、頼瑜の直接の師の歌だけではなく、実範、貞慶など、頼瑜の法脈に繋がる南都の先徳の歌も記載されていることが確認された。これらの僧侶は、『真俗雑記』の中で、「中川義云」「南都解脱房説云」「報恩院僧正御房仰云」「明恵房義云」「木幡口伝云」として繰り返し

口説が引かれており、頼瑜の思想形成に多大な影響を与えていることが知られる。

『真俗雑記』に記載された和歌を検討することは、頼瑜の和歌知識が理解されるのみならず、頼瑜周辺における和歌活動の解明にも繋がるだろう。さらには、先に見た説話のように、談義と和歌との関わりも検討する必要がある。僧侶にとって詠歌が如何なる意味を有するものなのかを検証していくことは、ひいては、南都における『栴葉集』や、醍醐寺僧の手になる『続門葉集』とも関連する、重要な問題であると思われる。

### おわりに

以上、『真俗雑記』の中から説話や和歌など、頼瑜周辺におけるさまざまな言説を取りあげ、言談の場の存在を明らかにした。『真俗雑記』には、『沙石集』『雑談集』『一言芳談』『古事談』『江談抄』『古今著聞集』などの類話が散見するが、こうした説話は言談の場で語られ、談義の場において新たな意味を付与されたことが想像される。門室において言説が再生産されたことを示すものと言えよう。

『沙石集』『雑談集』との類話が存することは、頼瑜が両書を選んだ無住と同年齢であることと、あながち無関係ではないだろう。<sup>(18)</sup> 頼瑜が『真俗雑記』を起筆した頃に、無住は真言密教を学んでおり、両者の交流が想像される。無住が積極的

に説話を収集したのに対して、頼瑜は真言密教を修学する中で、説話をその領域内に収めているのである。

『真俗雑記』内における「説話」の位置づけや、頼瑜がその説話を所収した契機、その意味などについては、さらなる検討を要するだろう。また、『真俗雑記』には本稿で論じたもの以外にも、文学作品に関連すると思われる興味深い話が数多く記録されている。<sup>(19)</sup>

説話集に採られずに埋没している言説の掬い上げも含めて、真言圏における文学活動をさらに解明していきたい。

### 注

- (1) 牧野和夫氏「延慶本『平家物語』の一側面」(『藝文研究』三十六号、昭和五十二年三月)、同「深賢所持八帖本と延慶本『平家物語』をめぐる共通環境の一端について」(水原一氏編『延慶本平家物語考証』新典社、平成四年五月)、同「中世聖徳太子伝と説話―律」と太子秘事・口伝・「天狗説話」―(『説話の講座』第三巻、勉誠社、平成五年二月)、同「延慶本『平家物語』と達磨宗―頼瑜周辺の二、三―」(『実践国文学』五十八号、平成十二年十月)、同「十三世紀中後期をめぐる一つの「文学的」な場について―意教上人頼賢「入宋」の可能性より延慶本『平家物語』と達磨宗の邂逅をめぐる一、二の問題に至る―」(『中世文学』第四十六号、平成十三年六月)、麻原美子氏「平家物語の形成と真言圏」(あなたが読む平家物語『平家物語の成立』有精堂、平成五年十一月)、同「平家物語」(岩波講座『日本文学と仏教』第四巻「無常」岩波書店、平成六年十一月)等。また、頼瑜の和歌については、

永井義憲氏が『代集』との関連から論じられている（『歌学書『代集』は頼瑠の撰か』佐藤隆賢博士古稀記念論文集『仏教教理・思想の研究』山喜房佛書林、平成十年五月）。

- (2) 『真俗雑記』に見られる頼瑠の和歌や歌書目録等については、これまでに以下の考察を試みた。拙稿A「頼瑠撰『真俗雑記問答鈔』考―上覚『和歌色葉』との関連から―」（大東文化大学日本文学会編『日本文学研究』第四十号、平成十三年二月）、同B「頼瑠僧正の和歌についての一考察」（頼瑠僧正七百年御遠忌記念論集『新義真言教学の研究』大蔵出版、平成十四年十月）、同C「頼瑠の学問と和歌」（佐藤彰一氏・阿部泰郎氏編『中世宗教テクストの世界へ』名古屋大学大学院文学研究科、平成十五年三月）、同D「頼瑠の歌学―『真俗雑記問答鈔』に見る歌会次第をめぐって―」（頼瑠僧正七百年御遠忌記念号『智山学報』第五十三輯、平成十六年三月）。
- (3) 『真言宗全書』本『真俗雑記』は、巻数の配列に錯簡が存することから、本稿では大谷大学本『真俗雑記』（安永九年（一七八〇）頃写）を用いた。なお、拙稿「『真俗雑記問答鈔』について」（『大正大学総合佛教研究所年報』第二十五号、平成十五年三月）において、大谷大学本と『真言宗全書』本との比較を行ったので参照されたい。また、『真俗雑記』の諸本や系統については、拙稿「智積院蔵『真俗雑記問答鈔』について」（『智山学報』第五十四輯、平成十七年三月発行予定）の中でも、智積院本を中心に論じた。
- (4) 空晴僧都は『撰集抄』巻七「中算幼稚時空也上人来師事」にも見える。
- (5) 本文は、旧字体や異体字を通行の字体に改め、私に読点を付した。
- (6) 因みに、大谷大学本『真俗雑記』第九は、惟圭が享保十三年

（一七二八）に書写したものを、さらに宝暦十年（一七六〇）に融澄が転写したものである。この注記は「惟圭私考云」として、寛延三年（一七五〇）九月三日、惟圭六十三歳の時に記されたものであることから、惟圭は、書写してから二十二年後に新たに注を書き加えていたことが分かる。

- (7) 引用は、続国訳漢文大成『白樂天全詩集』第四巻（日本図書センター）、昭和五十三年七月）所収のものに拠る。
- (8) 引用は『類聚名義抄』（風間書房、昭和三十七年五月）所収のものに拠る。
- (9) その他、『雑談集』第三巻には「スル如身後、有ニル何事一カ。応アツク、ラヨシナカハ、向レ世間、無レ所レ求ル。云々」（山田昭全氏三木紀人氏編校『雑談集』三弥井書店、昭和四十八年九月）とあり、『徒然草』百四十二段には「万にするすみなるが」と見える。
- (10) 口伝の中の物語については、阿部泰郎氏『因縁抄』（古典文庫、昭和六十三年一月）、田中貴子氏「天台口伝法門と説話―『溪風拾葉集』の「物語云」をめぐって―」（『溪風拾葉集』の世界）名古屋大学出版会、平成十五年十一月所収）において論じられている。
- (11) 信太周氏「醍醐雑事記」所載『平家物語』関連記事考―平教経・知盛最期談を読む―」（『軍記物語の窓』和泉書院、平成十四年十二月）参照。
- (12) 引用は、中島俊司氏『醍醐雑事記』（総本山醍醐寺、昭和六年七月）所収のものに拠る。
- (13) あるいは、頼瑠が書写の段階で改変した可能性も考えられよう。その場合、「説話集」の享受という面からも興味深い。なお、時代は下るが、この『真俗雑記』「尊師物語事」は、恭畏（一五六五―一六三〇）の『密宗血脈鈔』に引かれ、やがて『理

源大師寔録』(文化五年(一八〇八)自序)へと伝えられていく。

(14) 前掲注(2) 拙稿。

(15) 和歌の引用は全て『新編国歌大観』所収のものに拠る。

(16) 第四句「マテアリトテモ」が「テラアリトテモ」とある諸本がある。なお、貞慶の歌は『古今著聞集』卷二「解脱房法文宗義を談ぜざる事」にも「古はふみゝしかども白雪の深き道には跡もおぼえず」と見える。

(17) 前掲注(2) 拙稿BとC。

(18) 前掲注(2) 拙稿Cの中で、頼瑜と無住との交流について、頼瑜の和歌に見られる「一心」との関連から論じた。

(19) 例えば、『真俗雜記』第十四「亡者面書真言事」には、死人の額に「**死** **ま** **ま** **ま** **死**」の五字の真言を書くことが記されている。これは、『方丈記』の中で、仁和寺の隆暁法印が死人の額に阿字を書く行為と関係するだろう。古注では『大日経』から「阿字本不生」の説明はなされるが、行為そのものの注は見当たらない。隆暁法印は、死人の「滅罪生善」の為に、額に阿字を書き付けたものと思われる。

〈使用テキスト〉

『沙石集』『一言芳談』(「仮名法語集」所収)『古今著聞集』は日本古典文学大系、『江談抄』は新日本古典文学大系、『古事談』は国史大系に、それぞれ拠った。